



沈氏七部集

後稷叢

四

共七



續猿蓑集卷之上

芭蕉



いねらゝんてしゆ修ら松らな

まのうしそに白田あらあう

ゆらうら馬あもこのしに母藏モロて

ゆきやうていつく晩のゆるあひ

まのふらうらあうあう月の色

物脊あれて肌をうたう

沾圃

馬寛

里圃

祐

蕉

續猿蓑

禪寺に一月あそぶ砂の上
 榎の角乃をてぬる元
 後わしの半に傳ふるや
 ちれぬ娘みちく守りて
 月待よ傳ふるのころさうひ
 離のう舞をみちかたはし
 せれて来てぬるも梅もさく
 傳ふるころかき乃りわん
 蕉 法 里 覓 飯 蕉 覓 里

削るにちりぬのみの風
 おぬいにほのむちれぬる
 引立て、ついでに舞はるるや
 そとと火入よおとる 蕉
 花をさすやみちぬるのあは
 漕かーらのちるかろふの
 里 覓 法 蕉 覓 里

馬寛

雀^{カラ}の字や拵めて梅の葉

てらぎの岸のおもひ

心やぬを思つてまはれは秋草

好くしやうのそく月酒

おぼろのちやんちやんち

葎まはつておの洗足

泣圃

里圃

寛

泣

里

悔はさくらめのしあいのこころを
 懐かきんてちまふあつさ
 ありこころは葉まのち氣は
 ありあつさるる国方乃客
 何事もなくてあつさるる
 風よこめあつさるる
 春新秋のほろあつさるる
 花はのちまふあつさるる

里 葛 佐 里 葛 佐 里 葛 佐 里 葛

伊勢の幸洲のあつさるる
 花はさくらめあつさるる
 春新秋のほろあつさるる
 花はのちまふあつさるる
 風よこめあつさるる
 何事もなくてあつさるる
 ありあつさるる国方乃客
 ありこころは葉まのち氣は

里 葛 佐 里 葛 佐 里 葛 佐 里 葛

汁のあまゆるからすけ子のあまて
 あまゆるからすけ子のあまて
 口しり寺の松園をちまて
 厚のおさくあまてあまて
 淡うりてあまてあまてあまて
 早下してあまてあまてあまて
 肌入て秋にかかりあまてあまて
 顔よあまてあまてあまてあまて
 里 佐 寛 里 佐 寛 里 佐

けいを實の母にあまて
 あまてあまてあまてあまて
 車のをあまてあまてあまてあまて
 守て氣味あまてあまてあまて
 花のうけあまてあまてあまて
 あまてあまてあまてあまて
 里 佐 寛 里 佐 寛 里 佐

さざなみ 海鳥り 土 舟 船 南
み くの お さい だ の お ね ち り せ ね
大 根 の さ ざ な ぬ 土 の ぬ り せ ね
上 下 せ せ ぬ に ぬ り せ ぬ の お ね
漸 切 り ぬ ぬ の ぬ の ぬ ぬ ぬ ぬ
舟 ち り せ せ と ぬ ぬ ぬ ぬ

里圃

沱圃

芭蕉

馬寛

沱

里

糸思後の響り糸鳴極りて
 清く糸好を楓わぬく
 想の籠る糸をうけたり
 月利て糸をよめたり
 杖節を緩河の飛柳種たり
 糸こころ糸をやうぬりの糸
 岸の糸よとち糸の池ちきり
 伊弱糸つゝ糸綿とりのも
 依 葛 里 依 葛 里 依 葛

うき旅を懸とつ糸立後りる
 糸鳴るるるるるるる
 糸舟の糸の申よりほるとして
 糸の傍へ行をきとてたり
 百姓よちりてあつらふ糸糸
 こころ糸を懸る糸糸糸糸
 糸糸の糸糸糸糸糸糸糸
 り糸の糸糸糸糸糸糸糸
 依 葛 里 依 葛 里 依 葛

折しを空月の起るまゝに
 御に加減乃ちしめおきて
 月夜よこしめをひかへて
 おもひのすゝめをゆるして
 一ふゆき〜 唯乃米
 火燧の火つけて勝手はし
 ぶき人うひあをえ 位
 折しを空月の起るまゝに
 御に加減乃ちしめおきて
 月夜よこしめをひかへて
 おもひのすゝめをゆるして
 一ふゆき〜 唯乃米
 火燧の火つけて勝手はし
 ぶき人うひあをえ 位

里 佐 克 里 佐 克 里 佐

手拂子娘をやりて娘のさこ
 こあまのうらみをとらてはま
 したのおと躑躅のうらみは
 寺のひけららふ縁のま
 冬よりをよこしめをひかへて
 一ふゆき〜 あ〜る風

里 佐 克 里 佐 克

芭蕉

猿蓑にもれとるおの松を露に

けをるをりれと静なる 窓

水かき池のゆらりるありて

い徳作まははまをいそひ

鶴あうらやうてさるの月

つるらとれやうていんせとら秋

佐圃

芭蕉

支考

惟然

蕉

考

芭蕉

魚志すい一為て本さる筋の魚 然
 不空の標の癖をたすま 考
 舞々身て西川をもせたり 考
 中国よりの杖のるるを 然
 朔日の月をさくやう振舞 蕉
 一き相織り失てさうゆる 考
 さいせん なるまゝの比の概観 然
 さらしめあつたの月 蕉

あり一烟の人のうけおるを 然
 魚標さる 演り小 然
 見てゐる記と并る花の笑かき 蕉
 肩抜ひとりよ 考
 さら風の又るあはれなり 然
 わらばれ 脈をちり 蕉
 及年の内保をとな 考
 一吃り 然

考
 上

大世川なほう二なるあさき等の種
雪くさきふし 甲のころを
まらねの葉掛を皆あ家流
奥のせきををくひの作
酒より七有のやらふ月にて
赤鶏乳をくをり 西面
うらぬねのころなをり
藤江のとはらとねこの
考 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉

もををいしとあはねの風
大こつうひの奥より申ら
来摺もらあきよしとてゆき
しめて糸の中を押あふ
けあさう油ををたのけも
鴨の油のまこあけあま
考 然 蕉 考 蕉 然 考

今宵賦

野盤子
支考

今宵の六月十六日の夕々々あまのかがひ月
あまのかがひ月あけて夜雲の湖あめ秋
子ゆくとまをれを今宵の阿そひそひと
尊卑の席をさそそそそそそそそそそそ
~~~~~  
ひらひらおのききゆしあさりけとほくと  
~~~~~  
さそんを鳥とそそそそそそそそそそそ

支考

支考

わんわんよ糸のあんなにぽつぽつと雨の音を
のびのびと聞かすはうらやまをばらまきよ
あつぱつぱりつら何度の海川のさあつたよ西
年の暮れあまきつりしるも 一ひきり月
まらまのあはれいよほりて伊賀のら申く
父母の古懐きとあはれはの嵯峨らに
縁糸にて髪を襦袢の涼くめのさうよ
の原かたそやけらよあまきつりしるも

あつぱつぱりつら何度の海川のさあつたよ西
年の暮れあまきつりしるも 一ひきり月
まらまのあはれいよほりて伊賀のら申く
父母の古懐きとあはれはの嵯峨らに
縁糸にて髪を襦袢の涼くめのさうよ
の原かたそやけらよあまきつりしるも

橋を移場の卯へ追みか
 山くくふれ多きさしてあは
 飯櫃ちる西桶よそとあち打鎌
 膏てユアをささくろ 照澤
 おれつ度奇も積るく橋の事
 持節のちよよ夕日さ
 平岡よ葉を耐き たるこ確
 新風くくろ川の石風呂
 然 考 考 考 然

馬りて旅ひぬる月の影
 尾張てつきしもの多きなら
 歸好のこも 此花をあつれて
 西月ものく 纏もよこさく
 喜風よ善徳のほものいふは
 藤く村くあけらくくく
 喰くぬき尊も尊も口きいて
 何その町をら依よやう
 蕉 然 考 然 考 然

世に心を構ふ付らるるをいふ
巖こころを種有りて末
おちるを海先よと云ふ木の所
際の日およむる氣を
三つとらるるを酒のりはな
こゝかえの心をいふあらう
封付—又おちる月を
そら—ありて盆の上を
蕉
高

虫籠つる世の糸の糸の何所
うはなをあらう表 一固
今のつらな世をあらう
大なる世のあらう
盡ちる世のあらう
孫うけつる—あらう
高

十一

十一

續猿蓑集卷之下

春之部 花梅

花梅

温ふのあつこくあつたさし梅

其角

寝付ふに又さす内さあつ

芭蕉

類ふ似ぬちの向もあつた梅

洞木

ちと道中あつた般うらなぬ

花梅

角のあつたさし梅

花散て行くらん軒のやまは花

酒堂

鳥書ながら酒名よあまらして又君
うらまを七癖のやまのいれよ思ひ
こころはあはれ

酒歌名よ更へのあまきと富家の花

惟然

賭みして像あまねりけりて

支考

人のまをかく露りしを川橋

治徳

らもら日や思中一のたの水面

猿雖

七川よりたるともあはれ申の

陽和

らる所あまらるやを川橋

乙州

咲たをまじりきなら老木か

木並

家屋やあまらるを川橋

作荷

二の船やいりあゆむ綱の臺

子珊

裏金のいりあゆむ綱の臺

卓袋

田家

女若弱のあまらるを川橋

木子星

咲あらるを飯米又十石

桃着

1 一桐の影をしのいで
 2 桐の影をしのいで
 3 桐の影をしのいで
 4 桐の影をしのいで
 5 桐の影をしのいで
 6 桐の影をしのいで
 7 桐の影をしのいで
 8 桐の影をしのいで
 9 桐の影をしのいで
 10 桐の影をしのいで

一桐
 桐雲
 其角
 一鶴少年
 貞袋
 佐圃
 全

表葉

1 濡椽や花枝をさかすか
 2 夕波の舟よそをさかすか
 3 一かめの牡丹をさかすか

梅附柳

1 春もさかすか
 2 幾さかすか

芭蕉
 野水

守梅のあそび事業なり野老賣 其角
 里場又雄まゝやサシ免の記 昌房
 投入や梅のわきまを流の記 良品
 二病僧のなまぬ梅のさかすか 曾え
 あ〜し記の巻末ありて梅を 万半
 為るや梅の陰よて下駄の跡 魚目
 ま〜梅やさ〜いふまゝもあ〜り 千川
 霞所や梅のよちひま〜を落ん 大冊

天竺のや〜海に訪て

身よは〜まや〜梅の羅〜ん 遊糸
 ろれ〜此船のりや〜柳 千水
 付〜ま〜ようら〜川や〜 意え
 ち〜道を教〜ち〜や古柳 李封 仁東
 青梅のま〜れ〜せや馬の曲 九之丸
 痛ま〜けて〜海を過〜る梅〜形 巴丈

鳥 附魚

鳥

魚

きよよもりのあはれは義塵ナケシの車 其角

うらむらや思を堀越の風はあり 史邦

そらに手をとて体ちらやうのせき 智月

さうやあいのこころを物にまき 芭蕉

際を垂ちあしげき雛のちろくひ 去来

まらぬやあまはしやん雛子のあし 西堂

駒の月のあしやうのこころはか 傘下

うらむらにききくはなを 長白

燕や田をたうあつた馬のあし 野童

葉の中やあまを御してあや燕 少年 峯嵐

雀子や姉のあしひ 雛の棧 槐市

雁うらにならぬ雀乃子飼ひ 何瓢

あ鴨やああまはれたの儀惜 釣竿

さう野をあはれ 土佐

鮎の子はふよまは 洪の舟 土佐

わけうめやあまのあし 舟水 圃水

きしきしのしあひまらけはくま

子珊

る魚のきしきよふはくま

山蜂

はにのあひまらけ

きしきよふはくま

其角

よふはくま

たしきよふはくま

正秀

きしきよふはくま

け筋

きしきよふはくま

羽紅

川流や流まやほらあーの角

猿錐

勇の由きるやち業のそ

園指

味ひや梅のたよらありを

車来

黄く〜咲添かしのも思あ

荒雀

堤あり〜らひさるれきさ

馬見

疏あ〜れ土埋の切月や

拙俵

ぬ〜めは形よらるれ工

乃龍

早蕨やまきとらら

正秀

〜〜新名のあひひ肥る

夕可

月の影よ猫の爪は櫻屋敷の
浦の英やまゝのさくら花
一桐
圃菴

猫魚 附胡蝶

さくらや月よなび啼猫の魚
うよ魚よくめてや猫の盗喰
おまじう孔屋あけら野備小
探丸
支考
巳百

白目志川うや

さくらりても翅を動かす柳梅
柳梅

衣まゝのくまやまゝの鶴の海
蝶の舞おつら様よこゝはこゝ
風吹よ舞のやまら小蝶うら
さくらりて花みどりさ切鶴ひ
惟然
園坊
老羽
二里川
雪窓

春鹿

振おしりや唐紙の席の角
沢雄

春耕

お福のちかおてまゝの麻
木暮

苗れや笠縫とよ此看目お
千川乃田をかつらり遊皮人
山篇
江

桃 附椿

白桃や志山くも暮るるの色
金柑をさこ蓋なり桃のそん
依んりや葉の枝の上の葉の色
梅はくく申をさるるに桃の色
花さるるふ桃や奇舞妓の腸躍
其角
桃隣
介我
雪芝
水鷗
其角

江東の季由々祖父の懐のほろり
わのし経文歌のちり白く一休院の
光明とつゆ事を

小服綿を光をやと路むほろり
袖を枯くし巻ふ花咲桃の中
取あけてるちや桃のちその宛
ちるる桃のちりもろり子孫てんち
角上
跡香
洞木
野坡

歎冬 附躑躅藤

山吹や垣み二十ちる裏一重
園枿

田家乃人又對て

山吹も花あろり糸糸解たまん 酒堂

塀おろははく一糸株や蟻のよき 雪堂

家晴や穂まよさるる花のた 荆口

まら月

山の端まらり〜只なりまら月 魯町長清

まら月附春雪鑑

おろり草のたよりまら月 荆口

岫と調子合らまら月のあめ 乃龍

まら月産れあろりまら月 游刀

まら月か〜まら月か

旅店をまらり〜まら月

まら月花と山ろ〜まら月 支考

まら月花と山ろ〜まら月 桃首

まら月花と山ろ〜まら月 風麦

まら月花と山ろ〜まら月 風騷

まら月

まら月

汝干

乃あり枕の清涼なるぬぬ平去来

ふ川よ富士の麓やふ志おひ園坊

雑春

出おりのやあゝれ袖る許六

あゝあゝあゝあゝあゝ桐乃苗風臨

思おこのねめろくろやわり土音

うけろや農よ腰の掛ち配力

わまをちあゝめろくろや万手

あゝ毎に招きや思もや玄蘇

おのやあゝあゝあゝあ均水

あゝのやあゝあゝあ正秀

とんりの舞あゝあゝあ仙化

りあゝあゝあゝあ支流

三月廿

あゝあゝあゝあ支考

支考

雑言

まのやまのふらふらよる水

武仙の年

遠海をのりてまのたもと

百歳

まのやまのふらふらよる水

尚白

まのやまのふらふらよる水

圃商

母のぬきまのふらふらよる水

山峰

清なるはるを雲を顛倒してふらふらよる水

まのやまのふらふらよる水

千川

人まのぬきまのふらふらよる水

芭蕉

まのやまのふらふらよる水

其角

まのやまのふらふらよる水

山崎

まのやまのふらふらよる水

去来

まのやまのふらふらよる水

土芳

まのやまのふらふらよる水

凡睡

まのやまのふらふらよる水

まのやまのふらふらよる水

まのやまのふらふらよる水

猿錐

子作のちす川 越前やま ちりうーふ 葛平

背きうーあ ちあふんをさや花の 町

業平のまふたふじ 白尾の綱の 耕雪

秘の書頁のなうまをちやうーぬ日か 九板

く川まやちき若後の白比丘尼 前川

枇杷のまふのりうん 悔やぬあ 料巖

世の業や聲きあぬもの 忌夷 山峰

濡いろや大あうーけのぬ日乾 任行

え日やまやうーちうーよ 楕のぬ器 竹戸

我やうさうーに鏡すえのり 是乐

搦木や餅もやうーれろ 花志 沾圃

虫あーのろ 花目よ ぬうー 花あうー 夷 圃角

いよわおやあつめのいれきまきん

拙後

いよわおやあつめのいれきまきん

昼うちや月まらぬおもてた盛

花園

夕朝や酔てふちた窓の尻

芭蕉

夕やや裸ておきておあまこ

嵐蘭

藤の花あらしの夢みる入江小

孫香

菫の花に酔てし水の浮り小

十筋

蓮の花あつめいよわおやあつめ

白雲

客あつめいよわおやあつめいよわおやあつめ

良品

瓜

朝露よのちてて涼し瓜のお

芭蕉

姫ゆつや袖よ入てもきん

至曉

花ん

藤ねちち膳をいよわおやあつめ

風流

子高

系入やうる羽の風柱のゆき中

七
知

早乙女も強んてやんまのふ

園指

ゆとら男の柱おくれまふ

魚目

回柱舟あてちう船の帆ひ

重り

一風はくりわらうてやぬの香

少枝

里の子り燕振るふ南く船

支考

虫

段巻火の燭をくちあつる

許六

ら月に見まの雲を照より

野菰

涼

涼さや竹揺りり藪はこい

半銭

可葉花や唐糸にわふ夕涼

唯然

涼りのなまきりて

もまの葉や風をよらむ

史邦

涼さや如き葉まての繩もこら

を翠

るぬーや裏門明て夕涼

七
社寺

涼—さし半乳尾振て川の中

万幸

漫真 三句

腰かけて申に涼—き階子外

酒堂

涼—さや椽より豆まぬ

支考

生碑をゆりさくあしう涼うな

雪芝

まきびらぬを

女房屋のあひまて

涼風もあま—と寝のこりれぬ

游刀

いそか—夷申をぬけさ涼う能

全

まありく人よあまれてすくく車

去来

黙神よこまら涼くやるの上

正秀

歿人の帷子こく涼夕さく身

土佐方

涼—さや一き羽織の風も涼き

我眉

あ涼やさくひのこを月ちま

里圃

盛る

かこもや照りあこまじい庭の隅

野菰

木子盛らへむのちまの暑外

万幸

菖蒲者のついでに
よきついでに

ふたりのついでに清く涼風の思ふ

正秀

取替の内のあつさや梅はうひ

乙州

煤とらち由は思つて一々新

怒風

茨ゆの垣もさあつぬ暑有る能

素洗

糸のついでに暑も月にはあつた

我峯

何つぶりや扇をうらたはちあは

下苔

積あけて暑といふやあはちあは

車鼓

粘りやう飽もあのおつさう能

里東

立あつれさかしくとらやの暑

沼圃

舟のついで

菖蒲にぬるさうく岸のぬるさ

可誠

さすや烟のついでに庫裏の窓

曲翠

五月雨附々

さすはらやさささかやうに徴の

不王

さすはらやさささかやうに徴の

芭蕉

み月もや瞳ふれぬ磯はさみ

沓園

夕立よそ一傘さしり自傘

拙依

白るや蓮の葉あふく池の

苔蘇

夕くらやちりしけさる竹の皮

曉鳥

仲のまに傘のささやまう所

圃水

解

白るや中房りて縁のあう

正秀

ささやけりて中へささりけり

胡故

森の蝉涼しよあやほのさう
縁の中やぬの撒るさのさう

乙州

椋鳥

のしを

池の月や潮さちさうを伴

兼

雑

空も憐して手の動やせを團

秋風

雲の霞ふる葉やちや寺に烟

荆口

え渡も孫くひの申のちを川

知真

山

山

穂く部

名月

~~~~~

名月に桂麻の葉方圓の~~~~~

名月の花く~~~~~て穂白

~~~~~を伊勢の山申み~~~~て名月の  
~~~~~の二句ま~~~~ち~~~~て~~~~はく星  
~~~~~の葉~~~~んと~~~~にけ~~~~り  
~~~~~月を~~~~根の~~~~を  
~~~~~は~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~


山々此ら三々も藤の葉の
字比

名月や里のあつひのまき
木枝

場に居て月えや〜や遠様
利合

明もやあつわあ〜死す中
丹楓

明〜也何もちりぬおの道
野萩

船入乃夜宮よ〜川月ん
正秀

舟引のるあつひ〜月ん
文子

待宵の月ん〜や宮御
景桃

家よ〜老女と〜あつひりこ
お盛り御〜は〜は〜

姨捨を
園よのちらやりの
依圃

露あまて月入あつひの
馬鹿

さる〜月あつひ〜ぬ梢外
里東

月影や海の香や〜も二廊下
牧童

三十一
三十一

保川の案ふかちとひか所よ
水なき一て

川ささくこの川きもや内のみ 芭蕉

十六あきり所うに園のゆか 全

ささくひの園のゆかもやちとひのゆ 猿蓑

七夕

うかゆかあ園のゆかあゆの河 惟然

甲か合まうくまてゆか朝ゆか 涼多ふ

船船のゆかさうくゆかあゆの河 東潮

まかちとひまうくまてゆかあゆの河 依園

新ゆか薫姫の園ゆか 乙州

立秋

新まぬうゆかあゆの河ゆかあゆの河 香川

新ゆかあゆの河ゆかあゆの河 元次

新ゆか

新ゆかの花透るゆかあゆの河 極梅

新ゆかの花透るゆかあゆの河 位左

すゑにたけひぬ馬骨の筆少
まことかゝ鶴坂の杖もくぬ
一箇をった風よちりり 烟を
弓園とる比たれやあまらぬ
馬草 烏栗 支浪

贈芭蕉

百合をよこ葉を巻く余も
はの娘のなすももはしは
枯のちるまめをわく 万平
史邦

鶴はや尾のあつ時わあ
鶴頭の家るまきぬ日終り
折しや西風にまはれ松の
苔花もあやみぬ動く秋の風
山人のこゝろをばまきぬ
風もよ長くくぬりり
芭蕉 至曉 雪堂 荷葉 柳秋 松下

新秋の女をわく 甲上尼

あさくらの這ふてきく成く極る
ふしむあふさうふさうて湯の舟
朝衣にきくられ一人や笠帽子

菊指
風姿
其角

虫 附鳥

さくさく一匹傍に経る舟の
電馬や朝よあつてくぬらう棚
火の傍て胸すすふり虫のあし
秋のおやまの舞とまはし
このまや形よ似合し月の影

可南^サ
水枝
正秀
水鷗
杜若

鶴のや何の味ある羊の先
鶴のや腹まあやうるものと
蓮の空に舞さうらん鶴の
めげあふふさうひて死る鶴の
厚まにゆきく浦のまをり
鶴のやきりまはる川原
鶴のまをえあふはつや啼鶴
若の名はさうのまて四十雀

探丸
葛葉
示峯
文子
馬寛
氷固
支考
芭蕉

穉風

秋の勢や二書なること好む時
 雀子乃蟄も心も秋の風
 何なるも心も心も秋の風
 秋の風や心も心も秋の風
 まの心も心も心も秋の風
 心も心も心も心も秋の風
 おれしてまき海も心も秋の風

遊刀
 式之
 支考
 風園
 圃無
 ぬき
 猿籠

穉妻

穉して留守とのこと穉の風
 穉妻や心も心も秋の風
 心も心も穉つは心も秋の風
 心も心も心も心も秋の風

一東
 宇比
 土世方
 芭蕉

木實 附 甫

園の木の心も心も秋の風
 炭焼に供柿たの心も秋の風

為有
 玄虎

秋もや日おくる尾掃のりり

西堂

ほぬしやも帯をもろく梅の

香

も川草や垣もの清尾一し盡

依圃

伊賀の山申よ河原の

あなを結ひて

松草や都らのさの形

惟然

~~あなを結ひて~~

まの草やまぬおのまのぬり

芭蕉

楓

後庭の塀よとれり村の

小鯉

麻

あすおににおの麻の

風睡

あすおに麻あす守

一敵

農業

起し人き迎りまの

車扇

木の下に雀やらめ種魚の

買山

さほしげらるものめし

知雪

雪の午後よ

うらまをやりて

葛の葉をすくって煮ておいたら
芭蕉

早稲刈て煮つぷうりや百姓
乃龍

山雀のやまもつた舞おの痛
斗從

ちりよつたにふる鶴うらやま
支考

一おのまもや平らさんや
全

肌をいじ始よありまの
惟然

百ちりていさうおそ唐か
本名

大御所よあさひて格次と
つあつと 後よあさひと

そのはらやもつたさしたの種
占圃

菊

海草二百十日七さ
葛草

ちりちりあとあの玉牡丹
溜子

者大木綿のや下にさのた
支考

野益屏

すうあめからあの事あ
兀峯

借りけあの事あ
よま

暮秋

Campanula medium

鐘形花

鐘形花の草

鐘形花

みくろ部

附霜

らばの垣の根もみす

野坡

あつれも又おのり

水枝

らかみもみす

芭蕉

一時もあつれ

露沾

ゆーらぬ草

馬草

平押よみ返回らるる付るる
 柴賣やうくさうれの多廻り
 椀賣もやうさうの如付る
 元鯉のもてさうゆ付る能
 うらやうや積めうらう一うれ
 ぶよきて唐野まぬく付る能
 柿包む日ぬもたうらう付る
 うらうらうさうれて里を森付る
 野明
 高指
 空牙
 み有
 鶏口
 野萩
 森川
 里圃

沖西の能目うらやう付る能
 うらやうやうのおおく能の能
 うらやうやう一うらうと能の能
 佐圃
 水鯉
 支考

元禄辛酉うらやう
 九月廿二日遊園遊

遊園の能事さうやう月うらやう
 うらうけうらうさうらうの能
 うらうらうらうさうらうの能

うら—とぬ想や作ぬ事のみ

車中書

草

みねや疎幄の月透る

曲翠

ついでに〜嘆やみねの氷は花

氷固

みねのつたの〜ねや萩のき

唯然

芭蕉 趙南のちりき

山家集の題より

一葉もこちとぬ事の水く南

芭蕉

山家集のきえり南くゆり花

車廂

みねのちり山崎の山や鳥の

土佐

山家集のちりてや雪は花

露草

木下 州冬枯

おひら—木のきから〜お花の

佐徳

日生き〜て江の甜き〜山家集の

露沾

山家集のき〜山家集の

唯然

枯葉より足さりりよきあのみ葉外

秋風

むねのつよさ

むねのつよさ

とくろりの先をてゝる後をふり

一道

枯たてゝおのよまらぬ物もくちん

杉風

牛のけ返る枯葉のまゝあうね

柳醉

冬枯れまきまてんてんなつ

乃龍

草枯みまらぬてまらぬねり

利半

即ち枯てのまらぬおち

支考

木やうやきまもまらぬ家もまら

智日

風や背中吹らく半乃あ

風竹

木枯れ刈田の畔の換まらぬ

惟然

ふかりやま果まらぬ半紅角

塵生

夷講

ふひす梅酢賣み袴まらぬ

芭蕉

ふ比治痛替も鴨足ぬき

利合

鳥 附いませ

乃々の海まきこて

塵埃よめくぬ目もぢー浦魚 白空

追うけて書よころふ千もやの浦 葛葉

かおらとくと庚申や死あな形 ぶき

入海や碇の釜に啼 千も 白松

驚ケコロモにほくくぬくー鴨乃豆 芭蕉

川鴨を大追くくはけくく水 乍木

秋はよころひのつよは海嵐うま 三人 利雪

うらうらや海月よあろちあめ 外 車角

又く透や子持ひあのころ氷 付水

一塔よま川白魚やちのり前 杉風

わくぬ川や腹まわくして降雲 拙作

杜夫魚や何脈の大ききそ水よはふ
都の川よの〜あろくをやり

冬月 附いませ

管のやう賣ありくみの月
あゝ猶のわけは乾やみの月
何夏も藤乃るまてちり紙ぬすは
ふ他やけきぬるにの月

里圃

夫子

カ春

支考

埋火

埋火物習ふき客の歌あり
佛りさるあまをり燃ゆる火り燈り
自由の月をぬかりりまの燈り

芭蕉

少年 桃先

同木

雪

ゆき物乃に橋あり夕アらるる
新り月をくすくす酒の味
雪あゝぬるぬるなまこけ
鶴鶴 くのさくさくさくさく雪
雪垣やまゝぬるぬるの雪
ぬるぬるの雪まじりぬるの雪
片雪や雪降あらしすく儀

真角

全

冬来

祐甫

葛系

支考

圃吟

思ふにのまゝにや月枝のおゆ
髪利を降すもさうさうの
伊加え大和さうさうの
史邦 陽和 配力

神樂

おゆ系に蕪と冷きおゆ
史邦

御きこよ

今更何やうりくり子の降扣
降くは干鉢賣をすまがり
娘入のりもさうさうの降きこよ
痕を送りくはり降きこよ
路平 馬見 許六 伝圃

煤掃附録

煤掃のや嵐込のや
煤掃のやあはれよかめさうさうの
やとる隣のかや煤えん
孫香 黄逸 泉海 馬見

蝶々もやりすれてあつて

同知

蝶々掃也折あ一牧臨く

惟然

餅つふや火をかきち男を

仙水

餅はまやあくるの鶏の

嵐棠

もら搗の手傳ひよあや山伏

馬佛

歳暮の 附 正月の 衣配

くまの足返も酒をの市の

角

山砂やあまてきまの洗ひ

里東

賣るやと山てもあつた

草士

猿もあまのちりあつた

車来

大や款子ききき

万手

袴もぬ知事のもありと

孝因

年の市代き呼んお穢との

其角

おこちん小豆も市の

正秀

川流あ一はが

茨子

桶の桶のあつた

猿籠

天鵝毛のさむねさかして

唯然

後狝又筆を強めて

けらるる圖司口をうめりて

のちらとて伊勢のまをうして

ここのやのまをうして

あ——て今をたふ

くまのまをう

盗人のあめいあめあつ

芭蕉

余所よも懐てあつ

支考

漸に毒所あつあつの中

土芳

高白

高白

桃後

桃後

山峰

山峰

利合

利合

雑文

か屏風に糸を挽うら

針履

持所よ何風を吹く

土芳

井のあつあつあつ

土下

松林
 圃仙
 雪堂
 二谷
 佐圃
 杉風
 山陰や猿り鹿挑く夕日向
 想ねみ人ふきの根のまきさか
 火燧より霞より何をおぼひ
 雪堂
 圃仙
 雪堂
 二谷
 佐圃
 杉風

釈教之部 附 追善 哀儀

涅槃木

涅槃像ありよき身方同の
 孫とん命や 般手合る瑞彩の
 山寺や猶守るにありねをせ像
 貧福のあしとひきくるに涅槃像
 法圃
 芭蕉
 不撤
 山蜂

権佛

確仙やほろろあつたつ井戸の
 家花や仰うまゐて二と 月
 確仰や頼迦と程邊を従ふと
 之道
 不玉
 曲四
 曲四

愈々

冷物とよな水とほく 露あつり
 春梅乃々のあこしやうき 雲ふ
 やほ休や坊と山をふらふ
 浪圃
 去来
 嵐雪

甲戌のな大津よ侍をこの

かゝの...より消息を...
 老四里よゆりて...

さあさ...はよき...の...
 芭蕉

悼少年二句

うら...と物...の...
 その親をきりぬ...の...
 支考
 惟然

...
 ...

青の...を...の...
 木葉

さくら木 糞糞やと成 桶の水 支那

法苑珠林

柚も柿もおろすれり 法苑珠林 法圃

臘八

鶻ささくりにてんれを納豆汁 許六

何のおれおのあまよりあまを大呼待 如行
雜記

洛東の真如堂に於て
善光寺如來開帳の時

涼しくも野の心もさへはなれり 去来

みづもみぢもみぢもみぢもみぢ 智月

いー畑や家ま川さうそい在世 乙州

いものかに川趣向かや富士あて 多田

いふもーに朝の月涼しむい 野坡

食堂に雀啼たり夕時 支考

旅く部

送別

え禄七手のまをさるるの
あまをんをとりて

まみぬくに降るのん世のふく程 荷号

つのもや柿喰ひありのちのど 惟然

詩六ウ

本巻巻におもひくは

旅人のちるるにも似よ権のた 芭蕉

留別

俗の惟然と定あり

古婦のゆり付

嵐やうもやまの草ひまかへり

むす

鮎の子にまきく魚送るふの外

芭蕉

甲斐のこの婦の泣き声

うらみのいせにかなして

年ありて牛に乗りはる草むら

木暮

柳のはやしをせまらるる旅の音

越人

みくもたしくつるさ川橋や旅の音

野狂

あめの國のあまらふ時

まらふのこのさういふまゝにて

ろ孔くまを谷地やうりし中むら

ろぬ

十圓のちの小はなまちりぬ秋の風

許六

大名のこぼれもはなはたおもしろ

全

くはなはた

くろくちもまのまのくはなはたの猿

魚尾

ほろくちもまのまのくはなはたの家

猿雖

あまの光くまのまのくはなはた

我輩

おちるいほきまてゆはあり

史邦

田國の心さし一もあし一存ありの
とあへりて

文意の解あしけき秋涼

七人
呂丸

我圃園つゝ九旅の境くね

佐圃

常陸の園は一あひとらふ所は
あまらてやとりあんとま一に
そのおもとあまあまてあまを
くまらとれと一お別けの軒の
下にあまあり

あ——と

椽のあはら情や梅に虫は粥

支考

ま川魚や道よとらふ梅もと

全

え禄とまのあまあまのあま
より武らよあまらとてあま
の驛あまらとあまらと

あまらと

宿かりてあまらと

あまらと

續猿蓑を芭蕉翁乃一派り争え
何人の機をいふを志すに翁は此の
悔伊集とせしむるを見ればふり
此神子あり某に云ふらむを録して
漸く日本のもちたすをあるん
せふ廣くあるをいふ一紙あり書中
或は書けしあるいふ入ふれは
くはるはるすのすなり

巻五

八

四

一子...
乃書...
とふ...
一子...
乃書...
とふ...

之祿十一寅

かろく

一七...



又日吉日

